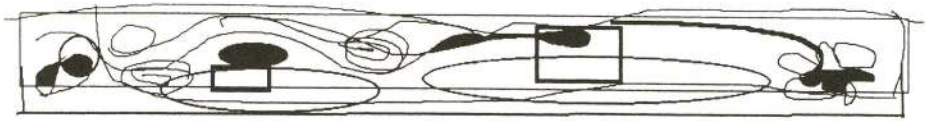
村野次郎創刊

香蘭

2022年(令和4年)9月号

第 99 巻　　第 9 号　　通巻 1101 号

二〇二二年(令和四年)九月一日発行(毎月一回一日発行)　香蘭　第九十九巻第九号



香　　蘭

2022年（令和４年）９月号
第99巻　第９号　通巻1101号

目　　次

村野次郎作品　私の愛誦歌（85）……丸山三枝子…表二
作品
一……2
二……21
三……28
推薦香蘭集……35
香蘭集……36
作品一特選（七月号）……石井・市川・伊藤（美）・岩田・柏原（義）・工藤・城・鈴木（桂）・中村（か）・西野……14
作品二、三特選（七月号）…江口・小林（ま）・沙阿羅・中村（陽）・西・藤本・大塚・小笹・川久保・徳渕・馬場……16
村野次郎への旅（149）……千々和久幸……18
一頁公論（16）それなりの決心……森田徹……20
七首抄（七月号）……工藤・市川・原（礼）・菊地……27
私の読む現代短歌（15）「想いの波」を凝視した浜田到……田中あさひ……42
エッセイ・自由研究　九十九里浜の鉄幹歌碑～灰の底より～……髙畠憲子……44
焦点（七月号）具体が想念を引き寄せる歌……桜井京子……46
作品評（七月号）
作品一……香山静子……48
作品二……江口絹代……50
作品三……髙田みちゑ……52
香蘭集……能城春美……54
耳言あれこれ（10）……田中あさひ……56
緑地帯……川久保・石川・西﨑……57
明宝研究会第一二九回六月例会　若山牧水……関口静子……60
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向……66
歌会及び会合・会員消息・他……70
編集後記・新宿日記……74・表三
表紙絵……中村陽子「浮遊」　目次・緑地帯カット……和田和雄

村野次郎作品　私の愛誦歌（85）

丸山　三枝子

足悪くおくるる友をいたどりの咲く坂道に
待ちていたはる

『村野次郎歌集』

「箱根の旧友会」の連作八首の七首目に置かれている歌。昭和三十九年の作だから、作者が古稀のときだ。〈おのおのの人生持ちて集まりし旧友同じ丹前を着つ〉の歌があるから古稀を祝う会だったかも知れない。

これは、箱根の宿で一夜を過ごした翌日の一齣なのだが、「いたどりの咲く坂道」がいいなぁと思う。虎杖は田舎の山径の何処にでも生えていた。夏になると白い小花をつける。酸味があるからスカンポと呼んで親しんだ。

北原白秋詞、山田耕筰曲の〈土手のすかんぽジャワ更紗昼は蛍がねんねする〉が浮かぶ。

難儀して坂を登ってくる友を待ちながらふと見ると虎杖の花が咲いていた。そこには他にも幾つかの夏の花が咲いていただろうが、作者の眼はその中から、地味だけれども白い小花を多につけた元気な虎杖を掬ってきた。旧友を労る作者の思いが、虎杖に重なる。

（短歌研究社文庫『村野次郎歌集』84頁。『村野次郎三百首』には収録されていない）

四選者の作品

手間暇かけて　　平塚　千々和　久幸

核の傘差せば濡れぬという神話信じ朝あさ生卵呑む
核兵器使うと脅す国の増えチキン戦争それチャッチャッチャ
エキストラだけを残して退却す戦とは手間暇かかるものなれ
バス停の追分にある「三五郎」居酒屋にして渡り鳥の巣
迸る若さがある夜戻れるを誰にも言わず夢より覚めて
鈴蘭の花に降る雨昨夜見たる夢のまわりが仄明かりして
喫茶店の窓より紫陽花に降る雨をリメーク映画のごとく見ていつ
四度目のワクチン接種終えたると病棟の妻に書き投函す

ハルノノゲシ　　東京　桜井　京子

傘を差す人と差さない人のゐて差さない人の上に降る雨
昼顔は咲いても咲いてもさびしさう鈍感力がほしいと言へり
踏み台にされたんだわと思ふとき急に大福がたべたくなつた
些細なるミスなのだらう肩先にふんはりと来るハルノノゲシは
「ぼくらが」ときみが言ふとき遥かなる昭和が匂ふほの明りして
スマホ失せて探しあぐねてそんなものどうでもいいと思ひはじめつ
ウクライナの国旗もたねばベランダに青と黄色のタオルを掲ぐ
褒めごろし嵌めごろしああ皆殺し戦争とふは殺しあふこと

ホタルブクロ　　横浜　渡辺　礼比子

錦糸町に停車したればビルの間にぬっと現るスカイツリーは
ワイキキの夕焼けのように甘やかな一日があったはたちの夏に
停車する三分間を耳澄ます逗子のホームの子つばめの声
親子三人コロナに罹り癒えしとぞ後から告げ来離れ住む子は
亡き友の株分けくれし擬宝珠の花咲き揃うまた夏が来て
席を立つ時は必ず忘れ物を確かめんと決めしことを忘るる
山道にホタルブクロの花と会うひとりが好きでひとりは嫌で
ガン保険申請したく……電話する夫の声の淡淡として

駄作ながらも　　鎌倉　香山　静子

寝てゐても短歌が無精に気になつて五七五・・と指を折りゐる
五七五・・駄作ながらも粗雑でもどうやらまとまる短歌らしきが
これは良しこれはまだまだと言ひながら何とか整ふ短歌らしきに
永年の修練ゆゑと思ひつつ整ふ短歌を見つつ安堵す
もう少し経てば必ず癒えると言ふゆるり休まむ八月一杯
長き日々病みゐし姉もかくの如短歌を詠みつつ救はれたるか
鎌倉には次世代へ続く人らゐる暫し休まむ身を横たへて
和歌・短歌・三十一文字とふ呼ばれゐる短歌はわれにはこよなく大事

作品一特選

（七月号作品から）　　渡辺礼比子　選

哲学の道　　習志野　石井雅子

姉、夫、息子と歩きし「哲学の道」を今日は一人で行くも
春の雨にくつを汚して尋ねゆく桜の下の谷崎の墓
姉さん六角タコ錦「京の通り唄」諳んじあるく
亡き夫と泊りし宿はこのあたり柳馬場蛸薬師通り
「権兵衛」のうどんをひいきにせし夫を思ひつつ祇園を通り過ぎたり
発車して五分で食べる弁当にこたびの旅も悔いのあらざる

・京の旅に亡き人を偲びつつ、新たな出発を遂げようとしている作者。

「まん防」解除　　東京　市川義和

パソコンにシンコウと打てば「侵攻」が　三カ月前「進行」なりしに
いくたびも閉店セールで生き延びしジーンズメイト本当に閉店
経済を回す魂胆見え見えの「まん防」解除春分の日に
腕時計を右手に巻きゐるプーチンよ　時計の針に何見てゐるか
一発のミサイル弾にマンションが一瞬にして瓦礫となりぬ

・様々な角度から時事を詠む。四首目の発見と発想の飛躍がいい。

夜のほのあかり　　川崎　伊藤美恵子

さくら花舞い散る中を夫とゆく「こうだクリニック」この世の外か
この人と会うのもこれが最後だろう中華料理に夜のほのあかり
昨日のことはなんだかみんな白かったホテルも料理も交した言葉も
入所者から見えないところで咲いているなんの役にも立たないさくら
疲れたる体はオワンクラゲかな電車の揺れに漂いており
ハンガーに干さるるシャツが肩組んで物干し竿にゆるる春なり
この石の異様な重さは隕石と夫は手に置くまた取り出して

・夢とうつつのあわいに身を置いて詠む。一、二首目の結句に注目。

松江城を背に　　松江　岩田明美

隣国に逃れる母子の映像を今し見た眼でさくら観てをり
婿ふたり赴任する者戻る者島根と鳥取横に長くて
晴れるとふ予報に確とこはぜ掛け畑に来れば蝶の飛び初む
「満開よさくらさくらは満開よ」松江城を背に歌子さんが呼ぶ
良く来たと梁を見上げてつばくろに声掛けてゐる泥靴の夫

・「こはぜ」「泥靴」等の細部の丁寧な描写から豊かな世界が広がる。

三日を降れば　　尾道　柏原義清

そら豆を手入れしている畑に来てそれは何かと尋ねてきたり
理容師はわがあごひげを剃りながら返事出来ぬに話しかけくる
咲ききった桜の古木を眺めおり明日から一気に散り行く桜

久びさの雨を喜びもう要らぬ雨となるなり三日を降れば
ほととぎす今宵ひとしおさみしかり妻の命日近づきて来る

・肩の力のぬけたユーモリスト。五首目はしみじみとした追悼歌。

明日を待とう　　東京　工藤　渓子

「雲場亭」のディナーすすみて夕暮るる浅間山ゆるく煙上げいし
昨日と同じ今日が暮れゆく穏しくも何かが違う明日を待とう
初蝶と呼ぶかは知らね白き蝶新緑の庭を去りやらず舞う
子が植えしみかんの木より生れし蝶しばしを舞いて旅立ちゆけり
遠き地の戦争のニュースかつてわれら犯せし侵略の傷みを重ぬ

・恵まれた日々の中にあっても過去の侵略戦争を忘れない理知的な人。

向日葵　　豊中　城　富貴美

通訳、字幕要らぬ爆音、銃声に悲鳴泣き声ウクライナ嗚呼
新緑の明るき季をウクライナのあまりに惨し　テレビ消したり
空青き下に広がる向日葵の地に戻れるは何時　ウクライナ
催花雨のやみたる朝の雪やなぎ土手きらきらとこぼれむばかり
花びらをスパイスにして持ちきたる弁当開く友とのランチ
鶯の声ききながら駅迄をひと送りゆく葉ざくらの道

・ウクライナの過酷な現実を感覚的に、自らの傷みとして受け止める。

ピンクムーン　　西宮　鈴木　桂子

スーパーを出でて見上げる夕空にピンクムーンのいま出るところ
特売のカップラーメン買ひ込みて戦火を見つつ暮らす病む身は
殺す人殺されし人　殺せしをたたへる大統領を冷めて見てゐつ
一日終へ一日の憂ひ負ふわれか炎えあふれつつなだるるみどり
教へ子は一万人とも二万とも現世の仕事ひとつ終へたり
「仕事がつらい」子の呟くを聞こえないふりしてじつと聞いてゐる耳

・エスプリの利いた一連。六首目の親の哀切な思いが胸にしみる。

クレーン　　福岡　中村　かよ子

晴れた朝のろしのようにクレーンが突然上る私の空に
朝を飾るクレーンが好き赤と黄と青が未来を吊り下げている
クレーンを小一時間も見ておりぬ破壊し創造してゆくさまを
変わりゆくことを受け入れこの町の空の時計がカチンと鳴った
夢を見る行きたい所に延延と辿り着けない半端な夢を
入口も出口も何もわからないこれは夢だと分かる以外は

・予定調和の圏外にある歌。新鮮な魅力がある。

穀雨　　東京　西野　美智代

PCR検査を受けて陰性のお墨付き手に歌会に向かふ
久々の浦和は穀雨に煙りをり豊かな実りの兆しなりけり
初夏の光ひき寄せ今朝ひらくカラーの白が狭庭に一つ
晴天の鹿本通り子の乗れる向日葵色のバイクが駈ける
プーチンの戦ひ憎し然はあれど浅草マノスのピロシキ旨し
機は良しとどさくさ紛れの悪巧み許してならじ改憲改悪

・五首目の柔軟なバランス感覚、六首目の鋭い政権批判に説得力がある。

作品二、三特選

（七月号作品から）　　丸山三枝子　選

〈作品二〉

ロケット石鹸　　柏江口絹代

亡き夫のキャンプで使いし石鹸が倉庫より出づロケット石鹸
ロケット石鹸の社名の謎を知りたくて検索せしが詳細不明
そういえば夫はロケットのような人発射したまま行方の知れず
縁あって使いし石鹸亡き夫はロケットの名を多分知らない
創業は昭和二十四年福岡のロケット石鹸社いまは懐し

・三首目の言外の喪失感は限りなく、悲傷の深さが歌に昇華された。

優待券　　尾道小林ますみ

宮山に良い声で鳴く鶯に「もう一声」と強請(ねだ)りつつ行く
四度目の手術をすると同病の我に息急き切って告げくる
我は右腕きみは右脚二人ともリンパ浮腫とう病気持ちなり
今年度七十五歳の夫に来る優待券を選びなさいと
優待券はバス券あんま券タクシー券どれもいらぬと夫は言うなり

・五首目の下句には後期高齢者となった夫の反骨精神と若さが見える。

春になって　　相模原沙阿羅

路地ひとつ逸れて花を見て帰る何分咲きでも桜は綺麗
窓際のカウンター席にぽつねんとガラスに映る自分と食事
買い物と病院だけが外出先　春であろうと春でなくとも
道端のナガミヒナゲシ群れ咲いて揺れて揺れて彼岸に誘う
考える…プチプチプチと桜しべ踏みて歩いて諦めがつく

・壮年を越えて生きることへの微かな悲愴感、老いの翳りが窺える。

青葉　　東京中村陽子

一点の翳りもあらぬ青葉なりフェイクニュースがとびかう日々に
UFOと交信せるか青天にパラボラアンテナ動いたような
一日を笑顔ふりまき日の暮れて深海の底のソファーにしずむ
PCR検査のテントは静まりて大道芸のみ歓声響く

・一首目と四首目の、上句と下句の皮肉や対比の面白さを味わいたい。

静脈瘤　　横浜西文枝

老犬を労りながら散歩する夫も足曳き休みながらに
西方へ向かってのびる飛行機雲見ながら叫ぶ「帰省したいよ」
捨て切れずタンスに残したブラウスを思いなおして堂々と着る
喜びは瞬間に満ち寂しさはじわりじわりとわたしに沁みる
手の甲に静脈瘤が目立ちだし痛くもないが百歳の手だ

・四首目は一読概念のように見えるが、体験の説得力は見逃せない。

心の穴　　常陸太田　藤本佐知子

何もかも放り棄てても埋まらないわが終活の心の穴は
わが雛飾るを忘れ町に来て祭りの雛に言い訳聞かす
母の居ぬ部屋の座ぶとんひさかたの日射し溜めおり今日万愚節
留守居する犬に猫来て鳥来ておのもおのもに動くが見ゆる
桜花一気に咲きぬこの朝うわさ話を広げるように

・万愚節はエイプリルフールの事、妣が帰ってくる事は有り得ない。

〈作品三〉

馬酔木　　鶴ヶ島　大塚美智子

陽の匂い山の匂いの登山地図踏破したるに赤丸つける
急登を馬にも似たる息吐きて登れば嶺に馬酔木の垂れる
団子作りに余念なき声合わせつつ丸くなあれと四人の老女
わが畑の犬のふぐりや仏の座踊り子草が競い合い咲く

・二首目と三首目の、巧まざるウイットやユーモア精神を買いたい。

京の桜　　鎌倉　小笹岐美子

満開も蕾のところもあるという京の桜は少しいけずで
作られた染井吉野とは違いますうちら一度に咲かしまへんえ
西行の思い人なる彼の人のお手植えの桜紅の濃き
足早に歌舞練場へと消えてゆく芸妓目で追う春宵の路地に
先斗町の片泊りの宿にくつろぎて鴨川沿いの桜見ている

・一、二首目は京言葉を桜に言わせ愉しく四首目の情趣も親しみ深い。

花日和なり　　川口　川久保百子

ゆったりと川は流れて対岸の桜並木が色づきはじむ
くしゃくしゃに脱ぎ捨てられた靴下よ今日は見逃す　花日和なり
弘前のしだれ桜が散りだして三分の一の今年が終わる
大けやき芽ぶきの時はわくわくと来ては見上げる春物語
早送りして見る録画のミステリー春の嵐はいつしかやみて

・四首目の一括りの結句は読者を二分するだろうが、佳しとしたい。

寒戻り　　柏　徳渕育子

令和四年春の彼岸に雪が降る早々布団入れ替えたるに
去年いた桜の中のあの人が今年のスマホに写っていない
眩しかる若葉の中に梅の実は見上げる度にふくらみている
久々の歌会なれば気を入れて一首を詠まん手賀沼の歌

・二首目の「あの人」は亡くなったと読みたい処だが曖昧になった。

ゆうまぐれ　　松江　馬場美信

桜咲き菜の花の咲くゆうまぐれ蝶々のように天を翔びたし
振り返る犬に問いつつゆうまぐれ散歩しながらスマホでレシピ
パソコンの立ち上がるまで一分をゆっくり待っているゆうまぐれ
途中から白に変わった街路樹の躑躅の坂を行くゆうまぐれ
ゆうまぐれたかが人生さはされど難儀な人生　陽はまた昇る

・ゆうまぐれの題が作者の歌心を誘い、それぞれの世界を開示させた。

村野次郎への旅（149）

大正期の「香蘭」（十）

千々和　久幸

「香蘭」第四巻第五號は大正十五年（1926）五月一日に発行された。奥付は前号と異同はなく、この時期の「香蘭」は順調に発行され巻を重ねている。

総頁数は59頁、巻末には広告が掲載されており古泉千樫筆跡頒布會（日光社）、窪田空穂歌集『鏡葉』、早川幾忠編著『頭注古今和歌集作者別』など各一頁。

本号も巻頭は北原白秋の一家言である。二頁に亘って「竹田の言葉」「出居餘樂」が掲載されているが、これは田能村竹田の繪と詩に言及したものだが、短歌に直接関わりはなくやや専門的になるので今回は素通りする。

最初に目次を見ておけば次の如くで、一つのスタイルが確立されている。読者も安心して親しめるだろう。

短歌は同人欄が村野次郎以下十一名。次いで歌壇雑感に杉浦翠子、村野次郎、以下の短歌欄には南部松若丸以下十一名、歌集總論（三）清原齊、皐月集に小畑安子以下八名、前月歌壇合評、杉浦翠子、矢代東村、穂積忠、村野次郎、朝光集（短歌）に中西一朗以下十五名、香蘭のあゆみ來し道（五）本間樂寛、最後の春雨歌（短歌）に谷合喜雄以下二十五名、となっている。

さて作品の巻頭にある村野次郎の「浮間ケ原」七首から読んでいこう。

浮間ケ原　　村野　次郎

①寝て居たる牛さりゆきて庭の面のぬくみに蠅のむれてうごかず

②仔の牛のよりそひ來れば親の牛うごきはせずて眼をつむりたる

③ところてん噴井にひやす店先を越えてのどかに歩み來りし

④來て見れば里田の畔に童ゐて流るる水を濁らして居り

⑤風ふきてゆたかにしなふ竹叢の岸のかなたに遊ぶ舟見ゆ

⑥人群れて原に遊べり太鼓の音の河のこなたにさびしく聞ゆ

⑦兵營にラッパなりたりおのずからわれらは足をそろへて歩む

三十歳を越えたばかりの忙しない一日を、都塵を離れて草原を逍遥される先生が目に浮かぶ。タイトルになった「浮間ケ原」は作品には牧草地であるほかには具体が見えないが、ネットで検索すればその歴史も全容も詳しく出ている。場所は、東京都北区の北西端の荒川流域に広がる草原の一帯。わたしは一時期、浮間橋の手前（東京から見て）の赤羽台団地に住んでいたことがある。

ネットによれば、浮間ケ原一帯は桜草の群生地として往時より著名な場所。ただし戦後は自然環境の変化や荒川流域の開発で桜草は絶滅の危機に瀕し、現在は圃場に移植され浮間桜草保存会が世話をしているという。

田山花袋『一日の行宴』、永井荷風『葛飾土産』にも書かれているとある。

さてこれから村野先生の作品を読んでいくのだが、わたしにはどうも気が重い。この種の作品はいわば風景のデッサンだが、それが生真面目であればあるほど読者は退屈せざるを得ない。生真面目ということは、そこに風の入る隙間や脇道が無いからである。

例えば背後に人間の営みや心理が見える作品は、どうでも食いつく手掛かりがあるが、風景描写は起伏が乏しい。これはわたしが風景より人間を読みたいという単純な理由による。ならばいっそ感情移入を拒絶するような作品をということになろうが、それはまた別の世界と言うことになろう。

先生はかつて「人生百首」を発表されたあと、自然詠や旅行詠は読者の退屈をも考えて詠まなかった、と述懐されたのだった。

①の歌、先生の目は牛に注がれている。「庭の面」というから放牧ではない、牛舎のスケッチだ。また「ぬくみ」は春先か初冬を思わせる。やれやれ牛も難儀なことだ、くらいのところか。牛馬のあるところ、蠅や虻は付き物である。

ただし③を読めば、季節は「春先」「初冬」よりもっと気温の高い時期だと解る。②の下句は、牛とて親子の情愛は人間と違うところはないと再確認されたものだ。ただしこの発想は想定内だから、納得はしても驚きは無い。

③の歌、牛舎の前からさらに移動されたのだ。「店先を越えて」だから、立ち寄った訳ではない。季節の風物であるところてんをちらと見た、その光景が印象に残ったものだろう。眩しい日が射していたのかも知れない。

④の歌、往時の子供には、こんな遊び（いたずら）しかなかったのだ。スマホでゲームをする昨今の子供とは、自然に対する向き合い方が出発からこんなに違っているのだ。

⑤の歌、背景を草原と書いてしまったが、浮間が原一帯には竹藪などもあったのだろう。竹藪から覗ける岸のかなたの荒川には、遊ぶ舟も見えていた。

⑥の歌、荒川のこちら側では太鼓の音も聞こえてきた。人が群れていたのだが、先生にはそれがさびしく聞こえたという。草原の景物を目にしながら、先生にはさまざまな思いが去来していたのだろう。

⑦の歌、近くに兵営（兵舎のある、一定区域）があって、そこから突如ラッパが聞こえてきたのだ。そのラッパに自然に合わせるかたちで歩いたというのだから、何となく可笑しい。ちょっと剽軽な感じもするが、大真面目だったのかも知れない。

一連ではこんな歌に親しみを感じた。

ついでに「日光」四月號からの北原白秋、村野次郎の転載歌を原文のまま引く。

一等船室　　北原　白秋

・のうのうと謡のこゑはそろひけり陸ひとつ見ぬ海に來にけり

・海に來てはたやあはれか老いらくの連多くして謡ひほれたる

・豊けくてかへてあはれぞまさりける謡のこゑのなぎさにそろへる

春あらし　　村野　次郎

・霜ふりてひとりのわれにあぢきなきみ冬も今は終りたるらし

・春あらし吹きてこぼしたる松の葉は子が忘れたる車履の上に

・春あらしすぎし名殘の松の葉に光りしじけき朝づく日かも

・春あらし吹きてあかるし松葉のこぼれてあたこの障子に